



【研究の要旨】

今までの私を振り返ってみると、子どもたちを集団として見て、子どもの思考を私の思い描く方向に引っ張っていたことに気付いた。そのような教師のあり方であると、「子どもの思い」から遠ざかってしまうのではないかと考えてきた。そこで、「子どもの思い」を大切にしたい、また、大切にすることはどういうことかを考えたいと思った。

在籍校での実習授業で出会ったC児は、悩みながらも自分の考えにこだわり、わかりたい、考えてみたい、表してみたいという思いで追究をし、納得していった。

教師が子どもにわからせようとするのではなく、子どもの思いを大切にすることが、その子にとっての納得に繋がっていくのではないと思う。そして、私は、そんな授業を目指していきたい。

小学校6年生 算数 「比とその利用」

私の課題：子どもの思いを大切にしたい！

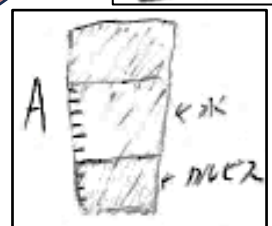
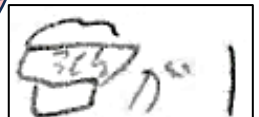
教師から見た分かりやすさで子どもに分かせようとするのではなく、子どもが、実際に具体物を操作したり、数字や式に置き換えたりなど、試行錯誤を繰り返していく大切さを感じた。

③ 納得

問題の○を個数としてみていたC児が、比としてみることに気付いた瞬間「きたー」と叫んだ。比の意味がC児のなかで結びついた瞬間であった。

② 自分の思いで
試行錯誤

「こうかな」「違うな」「分からない」「どういこと」というC児の思いが、さらに「わかりたい」という思いに繋がりが、試行錯誤を繰り返していた。



① 自分なりのやり方

4つのカルピスのうち、どれが1番甘いかという問題で、C児は、自分なりの比べ方にこだわり、自分なりに絵を描き、式や言葉に表していた。

次のうち、一番甘いカルピスはどれでしょう？
味別をしないで見つけてください！

A:スプーンでカルピス 40杯	水100杯
B:スプーンでカルピス 15杯	水 40杯
C:スプーンでカルピス 100杯	水350杯
D:スプーンでカルピス 50杯	水200杯



みえてきたこと

教師からみた学びやすさではなく、子どもが「分からない」「どういこと？」と試行錯誤していく過程の大切さを感じた。

今後は、子どもが事柄の意味を「なるほど」と納得していく授業を目指していきたい。



子どもが夢中になって学ぶ授業を目指して

第78期研究員

畔上 洋太

研究の要旨

総合的な学習の時間で夢中になる子どもの姿を目にした私は、教科の授業でも子どもが夢中になって学ぶ授業ができないものか、と考えたくなった。

★子どもはどんなときに夢中になって学ぶのだろう？

★子どもが夢中になって学ぶ授業には、教師としてどうあればいいのだろう？



1 研究課題の設定

総合的な学習の時間

教科の授業

ギャップ

夢中になる子ども

やられているように見える姿の子ども

教科の授業でも、総合の授業のように子どもが夢中になって学ぶ授業ができないものか？

2 総合的な学習の時間「矢出沢川調査」

★「何とかして魚を捕まいたい」と願うA児

「どこに罟を仕掛ければよいか？」次から次へと問い
「エサは何を使ったらよいか？」が湧き起こる。

→ 子どもは自ら考えてみたい「問い」が湧き起こったとき、夢中になって学ぶのではないかな。

★子どもと同じ思いで探究することを楽しんでいた私
教科の授業では、「しっかりと教えなくては！」という思いが強すぎたことが、子どもがやられているように見える姿につながっていたのかもしれない。

→ 教科の授業でも、子どもと同じ思いで探究することを大切にしていきたい。

3 実習 算数「分数」①

★「これ遊びじゃん」と言い出すC児

折り紙を5mmずつ折れば1/30になることを発見し、本当にそうなるかを確かめる。



折り紙を1/30に折っているうちに思わず楽しくなってきたことで、学んでいるんだか遊んでいるんだか分からなくなり「もうこれ遊びじゃん」とつぶやく。

子どもは活動そのものに面白さを見出したとき、夢中になって学ぶのではないかな。



4 実習 算数「分数」②

★自分なりの考えが湧き起こったD児

水のかさの図を5mmで割れば良さそうという考えが湧き起こり、嬉しそうにノートにまとめる。

→ 子どもは問いに対する自分なりの考えが湧き起こったとき、夢中になって学ぶのではないかな。

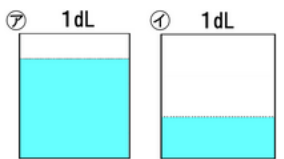
★みんなに考えを受け入れてもらえたD児

自分の考えを一度は受け入れてもらえなかったD児が、「すごい考えだ」と改めてみんなに受け入れてもらい笑顔になった。

→ 夢中になって学ぶ子どもの一番の願いは、自分の中で湧き起こった考えを一緒になって味わってほしい、ということではないかな。

★D児の考えのすごさに気づいた私

子どもが夢中になって学ぶ授業には、思わず子どもの中に湧き起こった考えの良さや、面白さを一緒になって味わうという教師のあり方が大切であると感じた。



5 成果と課題

★子どもはどんなときに夢中になって学ぶのだろう？

○活動の中で自分が考えてみたい問いや、問いに対する自分なりの考えが湧き起こったとき。

○活動そのものに面白さを見出したとき。 → 自由に試行錯誤できるとき。

★子どもが夢中になって学ぶ授業には、教師としてどうあればいいのだろう？

○「しっかりと教えなくては」という教師から、「子どもと同じ思いで探究する」教師へ。

○思わず子どもの中に湧き起こった考えの良さや、面白さを一緒になって味わえる教師に。

課題：子ども同士の思いをつなぐ教師の役割も大切に！

子どもが **自分事** として学ぶ社会科の授業を目指して



第78期研究員 田原 祐希



👉 研究の要旨

これまでの私は、子どもが「正しく理解できるようになる」ことが第一だと考えていた。しかし、まとめの全体共有の場が答え合わせの時間になっていると感じた私は、子どもの学びが深まることや自分事として学ぶことの難しさを感じていた。

歴史の授業実習で出会った子どもは、私が全く予想していなかった視点に着目した。子どもの問いを1つに誘導していた私を見つめ直し、その子なりの気付きや疑問から追究することはできないかと私は考えるようになった。

「文明が発達した場所では、文字が発明されている」という気付きからインターネットを使って追究を始めたC生は、文字と地位とのつながりを見出し、夢中になって追究を楽しんでいるようだった。

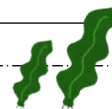
一方で、歴史には先人の努力や犠牲、思いなど、情報端末を使って知識を整理するだけでは「見えない」重みがある。それらを子どもがどのように感じながら、自ら問い直していくか考えたい。

👉 研究課題の設定

「わかりやすさ」を追い求めた授業や教材づくりを大切にしていた私は、子どもの表情から手応えを感じ、自分の実践に満足していた。しかし、日々の授業を進めていく中で、正解を追い求め、どこか他人事のように学ぶ子どもたちの姿が気になった。いくつか新しい教育方法を取り入れても大きな改善は見られず、私は学びの深まりや自分事としての学びに難しさを感じていた。

そこで、**子どもが自ら学びを深めていくためには、何を大切にしていけばよいか**を考え始めた。

👉 事例1

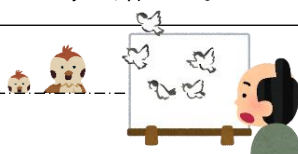


「特産物が集まる場所」に着目して情報を整理する場面で、A生はステップチャートを選択した。記述が不十分だと感じた私は、A生に情報を書き足すことを促した。

しかし、その後A生がとった行動に私は訳がわからなくなっていった…。

この事例から、私は学びの主語について考えるようになった。

👉 事例2



2つの錦絵を比較して、時代の変化を読み取る場面で、私は子どもが「服装」「乗り物」「海上の様子」の3つに着目するだろうと考えていた。

しかし、B生が着目したものは、私が全く想定していなかった視点であった…。

この事例から、私は子ども一人一人の興味や疑問が異なることを改めて痛感した。

👉 事例3



自分なりの気付きや疑問から、インターネットを使って追究を始めたC生は、知識がつながった瞬間に学ぶ楽しさを感じていた。夢中になって追究するC生の姿に、「自分事」として学ぶ1つの側面が見えた気がした。

しかし、「自分事」を「その世界に入り込み、自分で問い直す」という点で考えると、C生の学びはどんな捉えができるだろうか。

👉 研究の成果

- ☆子どもを主語にした学び
- ☆その子なりの素朴な気付きや疑問のよさを一緒に味わう教師



☆**知識がつながり、夢中になって追究する「自分事」**

👉 研究の課題



- ★先人の努力や苦勞、犠牲、思いなどの、「見えない」**歴史の重みを感じながら、社会の仕組みや自分のあり方を問い直す「自分事」**

→教師の意識から変える必要がある

テーマB 今日的な課題に対する多様な学び その子らしく学ぶ姿を受け入れ、よさを支えていく教師を目指して



第78期研究員 池森 潤

研究の要旨

私は研究所でA生とのかかわりを振り返る中で、待つことでこれまでの私では気付かなかった子どもの姿に出会えるのではないかと考えた。それはその子らしく学ぶ姿であり、子どもが自ら学びやすい形に作り変えたことで生まれた姿であった。子どもに学びを委ねて待つとき、一見何もしていないように映る私は、その子の内側に入り込んでみたり、外側からみたりして、頭の中で様々な思いを渦巻かせて考えていた。また、子どもの姿や行動に疑問や関心を持ち、その子をわかりたいと思うとき、私は自然と子どもの傍らにいた。そして、その子を丸ごと受け入れたとき、ああ確かにそうだよなど、その子を実感した。

その子らしく学ぶ姿

少人数で取り組むことやパソコンやオンラインなどを用いて学習することが自分には合っていると選択して取り組んでいたA生。生徒一人一人は、教師の指示で動いたのではなく、自分で考え、自分で選択して取り組んだ。その姿は、自分らしく学びたいという気持ちの表れに思えてきた。

よさを支えていく教師

私の中では、生徒の心の内に気持ちを寄せて考えていた。一方、その子の外側から捉えようとして見ていた。私は、生徒の心の内に入り込んでみたり、生徒の外側からみたりして、頭の中で様々な思いを渦巻かせて考えていた。目の前の生徒の姿を捉え、その姿が伝えようとすることを理解したり、その子を実感したりするのに、待つことが不可欠であることに気づいた。

研究課題の設定

はんだ付けが好きで楽しくてたまらないA生は、関心が強いことに非常に意欲的に取り組む生徒であった。一方、時折見せる暗い表情が気がかりな生徒であった。私は2つのA生の姿に大きなギャップを感じ、次第にどのようにかかわればいいのかわからなくなってきてしまった。

研究の成果

(1)子どもが決める学びがある

- ・子どもは、自分で考えて作り出した学びの中にいた。
- ・学びの道筋は一つではなく、その子が築いていく多様な学びがある。

(2)待つことの意味

- ・一見何もしていないように映る私は、その子をわかりたいと思い、頭の中で様々な思いを渦巻かせて考えていた。これまでの子どもの全部を私の中に取り入れたとき、ああ確かにそうだよなどその子を実感したように思えた。

今後の課題

- ・尋ね、委ねて、そして待つという心持ちで、一人一人のその子らしく学ぶよさを受け入れ、子どもたちと共によさを味わえる私であり続けたいと思う。





生徒が自分らしくいられる支援 ～生徒にとことん付き合うことを通して～

第78期研究員 北村香織

研究の要旨

私がA生と出会ったとき、A生は不登校であった。そして、私の中で「A生はなぜ学校に足が向かないのか、A生を抑えているものは何なのか、A生の心はどうしたら開かれていくのか」という問いが生まれた。

A生と向き合う中で、A生は自分の「もがき」を共に感じ、共に歩む相手を求めているのではないかと思うようになった。つまり、A生が感じる不安に対して一つ一つ丁寧にかけわり、一緒に考える相手を欲していたのではないだろうか。正解を教えてくれる相手を求めているのではないとA生が言っているように感じた。

研究課題の設定

私は中1のA生の担任になった。どの勤務校でも不登校生と出会ってきたが、忙しさから最低限のかかわりに留まる私があった。しかし、A生とじっくり接する中でA生と向き合いたいと思うようになった。

改めてA生とのかかわりを振り返り、学校や教師のあり方、そして生徒が自分らしくいられる支援について考えたいと思った。

支援1 私や学校の当たり前を少し見直す

登校に不安を感じていたA生。そこでオンライン授業とリモート朝学活を提案してみた。A生の反応は…？先生方の反応は…？



支援2 その子らしさが発揮される場の模索

A生と関わっていると、得意なことが見えてきた。周りの生徒や教師にもA生の得意なことを知ってもらえないだろうか？

支援3 進路実現に向けて共に歩む



私はA生の高校見学に何度か同行させてもらった。その際にA生が「入学したら友だちをつくりたい」と何度か発言した。私の実習授業の中で何か活動ができないだろうか…？

支援4 生徒の「やってみたい」を応援

「祖父母のためにハンカチを作り、刺繍をしてプレゼントをしたい。一人では難しいので、教えてほしい」とA生が相談してきた。どうしたらよいだろう…？



支援5 自立を考える

辞書を引くと、自立は「他者からの手助けや支配などを受けずに、その人の力だけでやっていくこと」とある。でも、本当にそう言い切っているのだろうか？A生を見ていると、自立にはもっと他の見方があるように思えた。



今後の課題

私はこれからも子どもの「もがき」を受け止め、共に歩むことができるのだろうか。正直に言うと、絶対の自信はない。しかし、そうあり続けたいと願いながら、現場で子どもに向き合っていきたい。

子どもの願いを理解し、見守る教師を目指して

第78期研究員 長尾小百合



見守る

研究の要旨

今まで私は、助言することで生徒の技術が向上すると思って指導してきた。しかし自分の理想とする制作ができない生徒の気持ちを、本当の意味で理解することができず、生徒の願いを置き去りにしてきたことに気付いた。

在籍校の実習でもまだ私は早く生徒の願いを知りたいと焦って、生徒の言葉を引き出そうとしていた。そして、生徒の思いを聴く前に水面下で様々な展開を予想して先回りし、生徒の悩みを解決しようとしていた。

研究所の研究会で、生徒本人に任せてみることで見えてくるものがあるという視点をもらった私は、生徒一人一人に寄り添うような「見守り」ができないかと考えるようになった。

研究課題の設定

制作途中の作品をゴミ箱に捨て去ったA生

↓
どうしてそのような行為に至ってしまったか、ずっと心に大きく引っかかっている私

↓
私の理想を押し付けようとする指導が影響しているのかも…。
生徒の制作や表現にある背景や

願いを理解したい！

研究の成果

生徒の声を聴かなかった

生徒に向き合えなかった

生徒を理解できなかった

見守る

生徒本人に任せてみる

問いかけ続け
聴き入ろうとする

生徒の思いを
感じている

完全には生徒の思いと一緒にきれいな思いながらも、ちょっとでも生徒に近づこうと問いかけ続け、もっと生徒の願いを聴き入ろうとする私になってきた。

リフレクションを通して

「生徒が戸惑わないように教師として教えてあげなければ」という思いが強すぎる私
生徒一人一人が自分の願いに向かって自由に選択することができる題材で実習しよう

生徒の気持ちは

「どうなんだろう」 「見守る」ことを大切にしたい

見守るって？

- とにかく生徒に関心を寄せる
 - 表情や行動の変化を見逃さない
 - 寄り添い、思いを感じる
 - 生徒が私に働きかけるまで待ち続ける
 - 少し距離を置く
 - 生徒と同じ材料や用具で制作をする
- **同じ体験をし、悩み、苦しさを共に味わった**

生徒の願いが自然と見えてきた 生徒を何度も捉え直していた

これからの私

生徒の傍らにそっと居て、生徒の思いを感じていたい。
生徒が歩み出した先にある楽しさや喜びを共に味わい
見守り続ける教師でありたい。

